イサム・ノグチと丹下健三による広島平和記念公園慰霊施設案コラボレーションの背景 ― 記念施設としてのコミュニティ・センターを中心に

中村 尚明

イサム・ノグチが丹下健三の協力者としてデザインした広島平和記念公園慰霊施設案については永年その実像が不明のまま様々に推測され、また批評されてきたが、2020年、ハーバード大学デザイン大学院（GSD）フランシス・レーブ・ライブラリー丹下健三アーカイヴの図面コレクションから、1951年12月14日から翌52年１月28日までの日付を持つ、東京大学丹下健三計画研究室で作成された本案のための一連の詳細な図面５点が論者により特定・分析され、慰霊施設デザインの全容がほぼ判明した。図面によれば、慰霊施設の各建築要素の主要な寸法に、丹下が広島平和記念公園・平和記念館のデザインに用いた二種類のモジュールの数値系列が適用されていたことから、本案がイサム・ノグチと丹下健三の緊密なコラボレーションによって作られたことがわかった。これらを本紀要前号の拙稿にて紹介した際、論者はノグチと丹下のコラボレーションの動機のひとつとしてコミュニティ・センターが共通の関心事であったことを指摘した[1]。それは丹下にとって市民の生活再建や国際的な平和運動の醸成・促進という社会的機能を担う複合施設であると同時に、被爆地広島の中心という立地においてその機能が発揮されることで、記念施設としての意味が自ずと生成されていくサイトでもあった。ノグチにとってのそれは、美術家と建築家が協同することを通して社会に貢献する場であり、19世紀以降専門化の進展に伴い孤立した様々な芸術分野を再統合し、且つそれと並行して失われた芸術と社会の直接的結びつきを回復するための実践の領域に属していた。

小論は、このノグチと丹下にとっての「コミュニティ・センター」を同時代のモダニズム建築の国際的な文脈の中で捉えることで、ふたりのコラボレーションの動機とそれぞれの関心事を掘り下げて考察しようとするものである。当時の日本に先例のないコミュニティ・センターを丹下は何によって知り、どのような文脈でそれを理解したのかについては、これまで十分な説明は与えられていない[2]。さらにまた、丹下はなぜコミュニティ・センターを広島の「平和記念施設」[3]、つまり新たなモニュメントとして提示し得たのだろうか。この問いは何よりもまず、戦後の丹下が広島平和記念公園競技設計以前からノグチと出会うまでの間一貫して保持した、慰霊堂や記念塔などの従来のモニュメント建築に対する否定的姿勢と分ち難く結びついている。さらにそれは必然的に平和記念公園・記念館プロジェクトにおける建築の「記念性（モニュメンタリ

---

[1] 拙稿「新出資料：イサム・ノグチと丹下健三による《広島の死者のためのメモリアル》図面（ハーバード大学デザイン大学院フランシス・レーブ・ライブラリー蔵）― 彫刻家と建築家の真のコラボレーションの記録」『横浜美術館研究紀要』21, 2020, 9-37

[2] 千代章一郎は、1951年のCIAM8（第８回近代建築国際会議）のテーマとなった「都市のコア」という観点から丹下による中島地区・基町地区を併せた「広島平和公園計画」の構想を論じる中で、丹下やギーディオンが都市の新しい「コア」を「コミュニティ・センター」と呼んでいたとしつつ、広島の復興都市計画にはル・コルビュジエの戦後復興計画、とりわけサン＝ディエの都市計画（1945年）における「コア」との類似が見られると述べている。しかし後述するように、「コア」はCIAM8の準備段階で浮上した呼称であって、コミュニティ・センターの概念が先に存在していた。
千代章一郎「丹下健三による『広島平和公園計画』の構想過程」『広島平和科学』34, 2012, 66, 註18及び19

[3] 「平和記念施設」とは、広島平和記念都市建設法に基づき国庫補助の対象とされる施設の内、平和記念公園・記念館等の広島が平和都市であることを象徴する施設の分類項目の呼称で、広島市や建設省の公文書中で用いられた。ここではモニュメンタル（記念的、または記念碑的）な建築施設の意味を読み取っている。
広島市「昭和二十四年九月二十三日　広島平和記念都市建設総合計画書（案）」広島市公文書館蔵

ティ)」の問題へと私たちを導く。またそのことと併せて、丹下がこのプロジェクトで強調した都市計画的視点とコミュニティ・センターはどのような関係にあるのかも検証されなければならない。

丹下は広島平和記念公園・記念館の競技設計当選案説明で、「実践的な機能」と「精神的な象徴」の調和が計画の目標であったが、それは「公園の趣味的な小細工」や、「建築に記念性を付与して得られるものでもない。むしろ近代建築はそのような態度を否定する」と述べ、「二つのものの調和は全体の総合的なプランニング（つまり都市計画：論者補）の中に見出され得る」と述べている[4]。ここで丹下のいう「建築に付与される記念性」とは、英連邦軍の広島市復興顧問ジャービィ少佐の提示した五重塔を模した慰霊堂案に象徴される、過去の様式の引用による歴史折衷主義のような、表層的意匠によって演出される「記念性」ということであろう。対して「精神的な象徴」とはそれとは別の「モニュメンタリティ」に属するものであろう。そして総合的都市計画の中に見出される「機能」と「象徴」の調和を実現するものとして、丹下はコミュニティ・センターを構想したと考えられるが、それはいかにして可能となったのだろうか。

そこでまず、「コミュニティ・センター」と「モニュメンタリティ」及び「都市計画」に関して丹下が参照し得た源泉を同時代の欧米のモダニズム建築の言説に求め、丹下の広島でのビジョンとの比較を試みる。併せて、それらの言説と1950年の来日以前のノグチとの関係を確認し、ノグチと丹下との間で何が共有されたのかを明らかにしたい。これらの観点は、広島慰霊施設におけるノグチと丹下のコラボレーションの動機にとどまらず、モダニズム建築とアブストラクト・アートの統合がどのような文脈で実現しつつあったのかを示唆する。そしてノグチ研究においては、建築家との協同作品を記述、解釈するにあたり、ノグチ単独の彫刻作品の場合とは異なる新たな視野を拓くものと期待される。

1　モニュメントとしてのコミュニティ・センター

1-1　コミュニティ・センターの二つの意義：都市計画とモニュメンタリティ

広島平和記念公園･記念館について丹下健三は1949年、1950年、1954年に併せて４回の説明文を記している。それらを総合して得られる丹下のコミュニティ・センターの特徴として、次の２点を挙げることが出来る。

①コミュニティ・センターは、平和記念公園内の特定の施設を指すというよりは、公園の立地と道路計画、広場と建物を包括することで、広島市域におけるその地区の役割を示す都市計画的概念であること。
②コミュニティ・センターは、記念塔や慰霊堂にとって代わるモニュメンタルな建築であること。

1949年に『建築雑誌』に掲載された広島平和記念公園及び記念館競技設計当選案の説明文は、その後何度か手が加えられながら発表された広島平和記念公園に関する丹下の一連の文書中最初のものである。この中で丹下は、当選案の具体的説明に先駆けて「都市計画と建築の一体化」の必要性を紙面の半分以上を費やして主張する。それは都市復興の行き詰まりを打開するために、都市の旧弊な「社会的構造」に有効な衝撃を与えることを可能にする「具体的方式」に位置付けられる。例えば鉄筋コンクリート集合住宅や、官庁その他の公共建築を都市の中に計画的に配置・建設することが、紙面上の作業に終始する区画整理のような旧来

[4]　丹下健三他「広島市平和記念公園及び記念館競技設計当選図案１等―広島市平和記念都市に関連して―」『建築雑誌』64(756), 1949, 42

の都市計画にとって代わるべき具体的方式であり、今や「建設それ自体が重要な都市計画の課題」になった。丹下はさらに、CIAM7（近代建築国際会議第７回大会:1949年７月、イタリアのベルガモで開催）においても、かつてアテネ憲章で謳われた都市計画の基本方針を有効に実現するための「具体的方式」を求めて、プランニング（都市計画）とデザイン（美学＝意匠）が議題に選ばれたと紹介している（但しこの時点で丹下はその報告書は見ていない）。丹下にとって広島平和記念公園の建設は、「それ自体重要な都市計画的課題」に他ならず、海外のモダニズム建築家の最新の問題意識にも適ったプロジェクトであった。

説明文後半で、丹下はコミュニティ・センターを提示した経緯を次のように述べている。

「ここは原爆の中心地であるとともに、広島市の中心地に位置している。ここを記念して何らかの施設をするとすれば、都市構成のうえからどのようなものがよいであろうか、これについて市長から相談を受けたときに、わたくし達は、 ―広島市民の有効に利用しうる中心的なコミュニティ、センター（ママ）になりうるもの、しかも、それが世界的に何らかの機能的役割を果たしうるものであるべきであって、単なる記念碑では絶対にあってはならないこと―　を強調した。」[5]

丹下は競技設計に先立ち、広島市長に対し中島地区にはコミュニティ・センターが造られるべきであり、記念碑を建てるべきではないと力説した。そして競技設計におけるコミュニティ・センターとしての平和記念公園は、広島市民の生活再建と世界平和の中心となる機能的役割を担い、記念館、広場、祈りの場と対岸の原爆遺構を包摂する複合施設としてデザインされる。それは「平和を観念的に記念するためではなく、平和を創り出すという建設的な意味」をもつ記念施設（モニュメンタルな建築）であり、丹下はそれを「平和をつくりだす工場」（後に「平和の工場」：論者補）と名付けた。

平和記念公園は記念施設であるにもかかわらず、丹下はこの最初の説明文から既に「観念的な記念」、「単なる記念碑」、「作為的な記念性」、「建築に記念性を付与して得られるものでもない…近代建築はそのような態度を否定する」、というように、建築の記念性または記念碑そのものに対する否定的な言葉をやや執拗に繰り返している。翌1950年８月の雑誌『新都市』の「広島平和都市建設特集号」では、丹下は記念性とコミュニティ・センターの関係をより詳細に説明している。

「1946年の計画（広島市復興都市計画：論者補）に参加していた時、ここには市民の中心的機能でありまた象徴である市庁舎と、市民のコミュニティ・センター　―それは公会堂、図書室、原爆資料室からなっている―　を施設することを提案した。（中略）その頃は、むしろ慰霊堂を中心とした平和記念塔のようなモニュメントを建設しようとする動きの方が強かったのであった。」

「市長からの再度の諮問にあった時、（中略）ここに設けられる施設は平和の工場でありたいと考えた。そうして、また広島の市民が平和えの（ママ）意志を結束させるための施設としてのコミュニティ・センターでありたいと考えた。それはまず、市民の集まるための広場と集会場を具えていなければならない。」

「これに似た問題は、この戦後、世界の建築界の重要なテーマの一つであった。　―戦いの終った平和の記念に何かモニュメントが建てられるべきか、―　われわれの時代には、もはや凱旋門も、将軍の記念碑も、また慰霊塔のごときものもあり得ない。市民生活の再建にとってそれらは無駄であるばかりではなく、むしろ罪悪である。しかもその市民生活の再建も単に個々の再建であってはならない。有機的な統一のあるコミュニティの新しい建設でなければならない。そのコミュニティの創造のために、その地域集団の共通の、中心

[5] Ibid.

施設であるコミュニティ・センターが、われわれの時代のモニュメントとなるであろう。これが、世界の進歩的な建築家の殆ど共通とも言える答となったのである。」[6]（下線は論者による）

先行研究ではコミュニティ・センターよりも「平和の工場」が注目され、丹下の広島平和記念公園に関する一連の説明文は、「慰霊か、平和か」の二元論で解釈されてきた[7]。しかし建築のモニュメンタリティという観点から見ると、慰霊も平和記念も記念施設の表現内容に過ぎない。丹下はどの内容に重点を置くかではなく、その表現形式であるモニュメンタリティそれ自体の是非（あるいは可否）をこそ問うたのである。そして見出された答えがコミュニティ・センターであり、それは慰霊堂や凱旋門に代わる新たなモニュメントとなるべく世界のモダニズム建築家から期待されているというのである。

1-2　コミュニティ・センターをめぐるモダニズム建築界の議論

丹下は具体的に参照した資料を挙げているわけではないが、1949年の説明文でCIAM7に言及していることから、そのメンバーや関係者の著作物を見たと想定することは的外れではないだろう。ところで丹下の「広島計画」は1951年のCIAM8で「都市のコア」のテーマの下に発表されたことから、先行研究では「広島のコア」がコミュニティ・センターよりもクローズアップされ、コアが原義未詳のまま、やや先験的に使われる傾向がある。しかし上に見た二つの説明文のいずれにも「コア」という言葉は出てこない。実はCIAMにおいても「コア」の用語が前面に浮上してきたのは、CIAM8に向けた綱領的出版物の準備を行っていた1950年夏頃であった[8]。CIAM8のホストを務めた英国MARSグループ提供の資料に基づきその開催予定を伝える雑誌『国際建築』には、「議題・CORE『核』の解説」として「核Core（コミュニティ・センター）」とあり、コアはコミュニティ・センターの別称であったことがわかる[9]。小論ではノグチと丹下の協同の動機に焦点があるため、さしあたり「コミュニティ・センター」の歴史的文脈を明らかにしたい。まず丹下が早くも1946年から競技設計に先立つ1948年にかけて広島市長に提案した、戦後の平和のモニュメントとしてのコミュニティ・センターの源泉を求めてみよう。

千代章一郎は、ル・コルビュジエ（CIAM副総裁）が1945年に提案した戦災都市〈サン＝ディエ復興計画〉（実現せず）における行政管理棟、自治会館、美術館、プールなどを複合して形成される市の中心部分、「新しい都市の『コア』」が、戦災を受けた大聖堂のある旧広場と接続している構成に、原爆遺構を取り込んだ丹下健

---

[6]　丹下健三「平和都市建設の中心課題―としての平和会館―」『新都市』 4 (8), 財団法人都市計画協会, 1950, 16

[7]　丹下健三・藤森照信『丹下健三』, 新建築社, 2002, 137-138

[8]　Konstanze Sylva Domhardt, *The Heart of the City, Die Stadt in den transatlantischen Debatten der CIAM 1933-1951,* Zürich: gta Verlag, ETH, 2012, 331-341
ドームハルトによれば、CIAMの綱領的出版物は元々 CIAM7で発表予定の都市計画のケーススタディを紹介する目的で同大会に向けて企画され、ギーディオンの提言に副い「シヴィック・センターとコミュニティ・センター」をテーマとする標題が予定されていた。1950年７月、同書の企画はCIAM8の大会出版物へと変更され、程なく『CIAM8　ロンドン1951 ザ・コア』と題した大会パンフレットが発行された。大会出版物の標題にはその後『都市のコアについて』が予定されたが、最終的に「ザ・ハート・オブ・ザ・シティー（都市の心臓）」に落ち着いた。ドームハルトは膨大な史料調査と緻密な解釈に基づき、「ザ・ハート・オブ・ザ・シティー」がCIAMの都市計画原理として成立するまでの過程を再構築し、それが米欧の建築家・都市計画家らのトランスアトランティックな交流の成果であったことを明らかにしている。小論は同書から多くの示唆を得た。

[9]「CIAM・国際新建築家会議の今年度の課題」『国際建築』18 (2), 国際建築協会編, 16

三の広島平和公園計画との類似を指摘している[10]。〈サン=ディエ復興計画〉はル・コルビュジエ作品集第４巻（1946年刊）に収録されており、丹下が参照できた可能性はある。同作品集ダイジェスト版で確認した限りであるが、サン=ディエ中心部分の図面表題と解説文に「コア」の文字はなく、代わりにCIAMでコミュニティ・センターと類義に使われた「シヴィック・センター（Le centre civique de St-Dié）」と題されている[11]。上記の類似点の他、独立した諸施設が立地する広場は歩行者専用ゾーンであり、自動車交通はその周縁部へと分離されていることも、丹下の平和記念公園計画における歩車分離の方法と一致する。後にジクフリート・ギーディオン（建築史家、CIAM書記長）も自著でサン=ディエ復興計画の中心部分を「破壊された都市のコミュニティ・センター（英語版では「シヴィック・センター」）」の例として紹介している[12]。しかし作品集もギーディオンもコミュニティ（シヴィック）・センター自体の記念性には言及していない。

論者は、ヴァルター・グロピウス（ハーバード大学GSD教授、CIAM副総裁）の著書『我々のコミュニティ再建（rebuilding our communities）』（1945年）に注目したい。丹下と同じく東大助教授（但し第二工学部）であった池辺陽が、彼の広島競技設計当選案説明文と同じ号の『建築雑誌』にこの本の解題を掲載していることから、丹下もこれを知っていたと見てよいであろう[13]。この本でグロピウスは「建築家のしごとを強く社会に結び付け、表題にも感ぜられるように社会の構成が一番基礎的な問題であることを明らかにした」と池辺が評するように、「コミュニティの再建」という言葉が当時の丹下や池辺らの世代の建築家に強いインパクトを与えたようである。丹下の『新都市』説明文にある「有機的な統一のある新しいコミュニティの再建」はその現れであろう。そしてグロピウスは大都市とその近郊における戦後の都市コミュニティの再建に際して、コミュニティ・センターこそ第一に建設されるべき施設であると力説するのである。

「私は近隣住区向けコミュニティ・センター（neighborhood community center）の建設が、住宅供給それ自体にも増して喫緊の課題であると確信している。（中略）再建の第二段階は　―即ち（大都市の：論者補）旧市街地の中に新しいコミュニティの有機体（organizations）を立ち上げることは―　従ってそのような（コミュニティ）センターを、前述の第一段階の（新設される近郊都市への）住民移転のプロセスによって空いた土地に建設することをもって着手されるべきである。」[14]（翻訳論者：特記以外以下同）

さらに注目されるのは巻末の次の一節である。

「我々の現在のコミュニティの状況が、まさにすべての市民一人一人に対し行動に踏み切るよう挑戦していることは明らかだ。今次戦争の後、そのような努力が結集して、我々のコミュニティの再建を通して全住民の生活状況を改善することが出来た暁には、誰もが購買力の増大と福祉の上昇によって利益を得るだろう。

---

[10] 千代「『広島平和公園計画』の構想過程」66
広島の旧産業奨励館が「廃墟」として保存されたのに対し、サン=ディエの大聖堂は修復されて本来の機能を存続させた。従って原爆ドームのような戦災の記念碑としての性質をル・コルビュジエが期待していたかは疑問が残る。

[11] Boesiger/ Girsberger, *Le Corbusier 1910-1960*, Zürich: Editions Girsberger Zürich, 1960, 319

[12] Sigfried Giedion, *Architektur und Gemeinschaft*, Hamburg: 1956（1960）^{2}, 98ff., Abb. 30. / ―, *Architecture you and me, The diary of a development*, Cambridge, Mass.：Harvard University Press, 1958, 161-163

[13] 池辺は文中で「現在再びこれを読みなおす時」と述べているので、本書を1949年以前、恐らく戦後のかなり早い時期から知っていたと思われる。池辺陽（抄）「『コミュニティの再建』について―ワルター・グロピウス―」『建築雑誌』 64（756）, 1949, 28-33

[14] Walter Gropius, *rebuilding our communities*, Chicago, IL.：T. Theobald, 1945, 54

私は、有機的コミュニティ（organic communities）を創り出すというアイディアを、戦争記念碑の計画の中心課題に据える提案をしてみたい。石や大理石でできた、いつもの氷のようなシンボルの代わりに、すべての州が、復員GIの協力を得て、少なくとも一つの近隣コミュニティのモデル地区（model neighborhood community）を、我々の戦死者の名誉のために建設すべきなのだ。我々の平和への熱望と幸福追求をこれ以上見事に表現できるものはないではないか。」[15]

新たな有機的コミュニティの建設が戦争記念碑にとって代わる。その中心施設としてコミュニティ・センターが最優先で建設されなければならないとグロピウスは主張している。しかも「石や大理石でできたいつもの氷のようなシンボル」の代わりに。丹下の『新都市』での説明文との類似は明らかである。

グロピウスのこの書の中には、20世紀前半の米国で確立された「近隣住区」の原理を踏まえた都市再生の理論と、モダニズム建築界で1944年頃から盛んに議論されていた建築のモニュメンタリティに対するグロピウスの立場表明とが融合している。

近隣住区（neighborhood unit）とは、米国の教育者で社会改革家のクラレンス・アーサー・ペリーが定義した都市計画的方法論で、住民ひとりひとりのコミュニティへの帰属意識を形成し、彼らの活発な社会生活（ソーシャル・ライフ）を保障するための理想的な住宅地区の設計原理である。その概要は①小学校一校を必要とする人口規模の居住地区をひとつの単位（ユニット）とし、②その周囲を幹線道路で囲んで境界とし、③住区内には小公園とリクリエーションのためのオープン・スペースを設けるとともに、④学校や公共サービス施設をまとめて、住区の中心点または公共エリアに配置してコミュニティ・センターとし、⑤商店街は住区周縁部の幹線道路沿いに配して隣接住区との共用化を図り、⑥特殊な道路体系によって住区内の循環交通を容易にする一方、通過交通を遮断するというものである[16]。

ペリーは米国で1911年から展開された「コミュニティ・センター運動」で早くから重要な役割を果たし、住宅地区の中心に位置する小学校を住民のリクリエーションや自治的活動のために活用する運動を展開していた[17]。元々コミュニティ・センターとはそうした住民の社会活動の拠点を意味する概念であって、特定の施設の名称ではなかった。近隣住区理論によって、それは都市を構成する最も基本的なコミュニティ・ユニットにおける社会生活の中心という意味を与えられ、都市計画上のエレメントとして概念化された。そこでのコミュニティ・センターは住区の物理的中心であると同時に、住民の社会生活（ソーシャル・ライフ）の中心なのである。丹下健三が1949年の説明文で、中島地区は「広島の中心」であるから「市民が有効に利用し得る中心的なコミュニティ・センター」にしたいと述べたことは、こうしたコミュニティ・センターの概念に適っている。

近隣地区理論はその後の欧米の進歩的な都市計画に決定的な影響を与えた。研究者ドームハルトは、CIAMメンバーとその関係者たちがアテネ憲章による機能別地区分類に基づく都市計画を超えて「都市の人間化」のビジョンを打ち立てるうえで、米国の近隣住区理論をトランスアトランティックな交流を通して吸収、発展させていったプロセスを膨大な資料調査と緻密な考察を通して明らかにした[18]。小論ではドームハルトが示した大筋に沿いつつ、丹下健三とイサム・ノグチの関心に関わる個別の資料をピックアップして論ずることとする。

---

[15] Ibid., 61

[16] この概要は以下の資料に基づき論者がまとめたものである。クラレンス・A・ペリー（倉田和四生訳）『近隣住区論　新しいコミュニティ計画のために』鹿島出版会, 1975, 26-42. / Clarence Perry, The Neighborhood Unit, *Regional Survey of New York and its Environs*, 7, New York: 1929, 34-35

[17] Clarence Arthur Perry, *Ten Years of The Community Center Movement*, New York: Department of Recreation, Russel Sage Foundation, 1921

[18] Domhardt, *The Heart of the City*.

近隣住区理論はまずペリーと同じアメリカ地域計画協会（Regional Planning Association of America）のメンバーであったルイス・マンフォードとクラレンス・スタインらに注目され、マンハッタン近郊のニュータウンとして有名なラドバーンに応用されたのを初め、グロピウスとマルティン・ヴァーグナーによる〈タウンシップ〉の研究、ジョゼプ・ルイス・セルト（CIAM総裁）とパウル・レスター・ヴィーナーによる〈モーター・シティー〉計画、さらにはMARSグループが参画した〈カウンティ・オブ・ロンドン・プラン〉などを通して、新興住宅都市だけでなく、旧市街の改造計画を含む大都市圏の都市計画へと応用されていった[19]。

グロピウスは『我々のコミュニティ再建』で近隣住区による都市計画が民主主義的コミュニティの形成に有効であると述べている。

「コミュニティの復興は、市民ひとりひとりを活動に参加させることによって、コミュニティへの関心を刺激するという思い切ったステップを最初から必要としているように思われる。（中略）過去の米国の事例がよいヒントを与えてくれる。ニュー・イングランドのタウン＝ミーティングは、住民全員を公的に招集して批判を述べたり可能な解決策を話し合ったりした、健全な民主主義的コミュニティの仕組みの好例である。これと似た会議を現代のシカゴで開けるであろうか？それを可能にするためには、都市の管理区域を分解して都市それ自体の中に適切な尺度に基づいた複数の近隣住区を設けることだ。

この図（MARSグループによるロンドン再建計画のための近隣住区図解）のような自己充足的な近隣住区は5000から6000の人口を擁し、小学校一校を必要とする規模である。次に大きな管理ユニットは市内のプリシンクトまたは市外のカウンティーで、それぞれ６から10の近隣住区を包含して、５万から６万の人口となる。最後に、最大となるユニットは都市全体または大都市圏そのものである。」[20]

コミュニティ復興のためには住宅よりコミュニティ・センターを優先せよとするグロピウスの主張の論拠がここにある。しかしそれにも増して、彼の言う近隣住区による都市計画が民主主義的であることが、広島の戦後復興計画案に取り組んでいた丹下健三の関心を大いに惹いたことは想像に難くない。グロピウスは人口規模に応じたユニットの階層構造を示し、近隣住区とプリシンクトを比較してその関係を説明する。丹下はこの書で近隣住区理論の民主主義的性質とユニットの４つの階層に触れることができたと思われる。

グロピウスの著作の一年前、戦後復興を見越して米欧の主要な建築家、建築批評家、建築史家、美術史家らに呼びかけて米国で出版されたパウル・ツッカー（ポール・ザッカー）編『新しい建築と都市計画―シンポジウムの試み』（1944年）に、セルトは「都市計画におけるヒューマン・スケール」[21]を寄稿した。この書物によるシンポジウムのタイトルは、建築と都市計画の融合を目指す丹下の関心に適っている。セルトの掲げる「ヒューマン・スケール（人間の尺度）」も、丹下が広島平和記念公園で用いた概念である。因みに同書には後述するギーディオンの「新しいモニュメンタリティーの必要性」も収録されている。

セルトは近隣住区理論によって都市に人間中心の「ソーシャル・ストラクチャー」を構築することを提案している。彼は階層関係にある大小のユニットを交通、産業、緑地など他のエレメントを含めて相互に関係づけることで、人間の福利にとって最も効果的な配置となるいくつかのモデルプランを提示する。各ユニッ

[19] Ibid., 150-297

[20] Gropius, *Rebuilding*, 18-19

[21] José Luis Sert, The Human Scale in City Planning, Paul Zucker（ed.）, *The New Architecture and City Planning — A Symposium*, New York: Philosophical Library, 1944, 392-412

トの中心としてのコミュニティ・センターは、ユニットの規模や形状に応じてシヴィック・センター、シヴィック・ニュークリアスなどの様々な名称で呼ばれるが、ユニットの物理的中心であり人々の社会生活の中心であるという本質は変わらない。これらを包括する都市計画上のエレメント概念として、セルトは「ソーシャル・センター」をコミュニティ・センターの代わりに用いている。以下その内容を見てみよう。

セルトは、戦後のCIAMの活動の中心テーマとなる近隣住区理論に基づく都市計画が必要とされる現状認識と、そのねらいを次のように述べている（抄訳）。

連合国の勝利が真に民主主義的な生活様式をもたらすならば、今日とは異なる都市の姿が必要とされる。これまでの都市が経済と産業の価値を優先させたために、それはビジネス・ライフの中心、投機的利益の源泉となり、今日見られる無制限に膨張を続ける無定形（アモルフ）、無秩序な状態を呈し、人間の環境は著しく損なわれた。民主主義においては、人間的価値（ヒューマン・ヴァリューズ）のために都市は設計されねばならない。都市計画はすべての人を含めた「コミュニティ全体のための計画」であるべきで、人間的因子（ヒューマン・ファクター）が我々を導く本質となる。

「新しいコミュニティを創り出すとき、古い都市から荒廃とスラムを駆逐するとき、自然の要素（オープンスペース、樹木、光と太陽）をそれらの密集した中心部に取り戻すとき、新しいシヴィック・センターを造るとき等々、我々は人間の福利を我々の尺度とし、我々の都市計画を人間のモジュールによって決定しなければならない。都市の人間化（the humanization of cities）が、対象の新旧にかかわらず、これからの何十年間の中心的な仕事のひとつであると思われる。」[22]

「（これまでの）都市は人間の自然な環境を敵意にみちた人工的な環境に置き替えてきただけでなく、都市の中心的な目的を果たせない事態に立ち至っている。それは人と人との接触（ヒューマン・コンタクト）を助長し、促進することと、そこに住む人々の文化的水準を高めることである。この社会的機能を成し遂げるために、都市は有機的ソーシャル・ストラクチャー（organic social structure）であるべきだ。」[23]

有機的ソーシャル・ストラクチャーとしての都市は、無定形と混沌の代わりに、「機能に応じたゾーン分類（クラシフィケーション）」と、「ヒューマン・コンタクトを誘発し発展させる場としての明確な目的をもったソーシャル・センター」を中心とする「様々なユニットへの再分割（サブディヴィジョン）をあわせた原理に基づく新しいパターン」によって達成される。セルトはソーシャル・センターに人々の文化水準を向上させる役割も与えていることをここで確認しておきたい。

こうしたセルトの主張は、CIAM4（1933年）とアテネ憲章（1943年）に謳われた機能別ゾーン分類だけでは都市問題は解決し得ないとの認識を反映しており、「機能的都市」にとって代わる戦後の新たな目標として「都市の人間化（ヒューマニゼイション）」を提案している。セルトは都市を人間に喩えて有機的ソーシャル・ストラクチャーを説明する。

「我々の都市の中に求められるソーシャル・ストラクチャーを再び作り上げるには何をするべきか？（中略）唯一の方法は、都市の現状の非有機的（インオーガニック）形状を有機的（オーガニック）な生きた肉体に変容させることだ。これを達成するには都市とその近郊を、はっきりとした輪郭をもち、良く計画されたユニットへと解体することだ。

[22] Ibid., 394
[23] Ibid., 395

これらのどのユニットにも広がりと人口の限界が定められ、隣接するユニットからの侵蝕からバッファーや緑地帯でまもられる。建物は分散したり様々なタイプが混在したりせず、その機能に応じて各ユニットのソーシャル・センターを囲むように配置されるべきである。このような有機的都市（オーガニック・シティー）はその名が含意するように様々な部位（パーツ）あるいは器官（オーガン）から構成されるだろう。それぞれの器官即ちユニットはそれが果たすべき特別の機能をもち、これを果たすことで全体としての都市のより大きな能力に資するように構成されている。」[24]

「これらのユニットひとつひとつの生活は、ひとつのソーシャル・ストラクチャーを中心にして展開するべきで、そこでコミュニティ・ライフが形となり、広まって行くのだ。」[25]

上に見たグロピウスと同じく、セルトも①近隣住区、②準市あるいはタウンシップ、③市、④大都市圏と、さらに⑤経済地域を加えた５段階の基本的なユニットの階層を挙げる。最小ユニットである近隣住区は、徒歩15分以内でどの住戸からも生活に必要な目的地に到達でき、人間の歩幅を基本とした広さとなる。その中心（ソーシャル･センター）はペリーと同じく小学校や教会などから構成される。近隣住区が５から７つほど集まって上位のユニットであるタウンシップを構成する。そこでは高等学校や市民向け文化娯楽センター、公会堂、博物館や図書館分館、音楽堂、公営プールなどを含む完全な社会サービスが受けられるだけの施設がソーシャル・センターに配置される。さらにタウンシップを相当数集合してできる市や大都市には、ソーシャル・センターとしてより大きな「シヴィック・センター」が置かれ、市民の文化生活の中心となるばかりでなく、市域を超えて地域全体に影響を及ぼす。そこには大学、大規模博物館、中央図書館、大型の劇場やコンサートホール、大スタジアム、市庁舎や政府機関の分庁舎などが置かれる。このようにそれぞれのユニットの中心にはコミュニティ・センターまたはシヴィック・センターが置かれ、それらが住民一人一人の生活と分ち難く結びつくことが目指された。こうしたソーシャル・ストラクチャーが効果的に機能するためには、分割されたユニットが閉鎖的になることなく相互に結びつけられなければならない。セルトはタウンシップと市の配置計画図（ダイアグラム）によって、それぞれにおいて近隣住区とソーシャル・センター、近隣住区と軽工業地区、タウンシップとシヴィック・センターがより効率的・効果的に結ばれる配置と道路計画を示している。

「異なる近隣住区同士の相互関係をいかにして確立するか、それらをどのようにグループ化してタウンシップとするかについて研究されねばならない。」[26]

CIAMのメンバーたちが近隣住区理論に見出したのは、ユニットの導入によって都市に明確な輪郭を与えて無秩序な膨張と過密化を防止するとともに、ソーシャル・センターによって求心的・有機的構造を与えることで、都市を「人間化」する可能性であった。コミュニティの本質が住民同士のヒューマン・コンタクトにあるのならば、コミュニティの再建としての都市の人間化とは、いわばコミュニティ・センターを中心とした生身のソーシャル・ネットワークの階層構造を建築・都市計画的に構築することである。それは建築的ストラクチャーとしてヒューマン･スケール（人間の尺度）に基づいて設計される。これはグロピウスの『我々のコミュニティ再建』にも見出される記述で、丹下が広島平和記念公園･記念館で用いた「人間の尺度」と「社

[24] Ibid., 398
[25] Ibid.
[26] Ibid., 400

会的尺度」にも通じる主張である[27]。有機的ソーシャル・ストラクチャーの建設によって旧来の経済・産業優先の非有機的都市を人間化しようとするセルトのビジョンは、丹下のいう「都市の社会的構造に衝撃を与える」「都市計画と建築の一体化」の一例といえるだろう。

CIAMの「都市の人間化」のビジョンは、最終的に『都市の心臓』(The Heat of the City)と題されたCIAM8の大会と綱領的出版物に結実する[28]。出版物の表紙カバーには、モダンな都市中心部の平面図(セルトとヴィーナーによる〈チンボーテ〉計画)に、The Heart of the City の文字と、人間の心臓の科学的スケッチが重ねられている[29]。CIAM8では参加各国からの事例(ケース・スタディ)がグリッド形式によって展示され、そこには丹下健三の「広島計画」も含まれていた。有機的ソーシャル・ストラクチャーをもつ都市を人体に見立てるなら、その中心であるソーシャル・センターまたはコミュニティ・センターは都市の心臓に喩えられる。コミュニティ・センターは近隣住区理論に基づく有機的都市の計画原理を象徴しているのである。建築家や都市計画家の課題は、コミュニティ・センターを中心として各器官をいかに効果的に結びつけるかにあった。原理は普遍的であり、各国からの事例報告は有機的都市が世界の様々な場所に応じて実現可能かを検証するためでもあった。それらの都市が様々な姿をとるように、コミュニティ・センターの姿も様々であるだろう。「都市の人間化」のための都市計画の無相のシンボルがコミュニティ・センターなのである。

1-3 建築のモニュメンタリティ

都市の人間化と並行して浮上してきた課題が建築の人間化、具体的にはモダニズム建築における「モニュメンタリティ」の問題である。セルトがソーシャル・センターに託したもうひとつの機能、人々の文化水準の向上は、このモニュメンタリティの問題と深くかかわってくる。

1944年、先のセルトの論文と同じツッカー編『新しい建築と都市計画—シンポジウムの試み』にジクフリート・ギーディオンは「新しいモニュメンタリティの必要性」を寄稿した[30]。「殆どの人々が機能的な建物の基本的必要条件さえ把握していない今の時点では、モニュメンタリティが危険な問題であることを十分承知している」と前置きしながら、ギーディオンはモダニズム建築が厳しく排斥してきた「モニュメンタリティの問題に取り組まざるを得ない時代が目前に迫っている」として戦後へと続く一連の議論の口火を切った。彼は、19世紀アカデミズムにおいて広く行われ、20世紀に入ってもなお社会の「支配的嗜好(ルーリング・テイスト)」である過去の様式の誤った引用・折衷による「偽のモニュメンタリティ」へと逆行することを戒めつつ、モダニズム建築における「感情の表現(emotional expression)」の必要性を主張する。なぜなら「モニュメンタリティは、人々の精神生活、様々な活動、社会的観念を表す彼ら自身のシンボルに対する永遠の必要から生じる」[31]からである。モニュメンタリティ実現の有力な具体的方法として、ギーディオンは芸術家(画家、彫刻家)と建築家の協同を回復することを提案する。芸術家こそ同時代の精神を誰よりも先んじて把握し、的確に象徴として表現できるからである。この新たなモニュメンタリティの実現の場こそコミュニティ・センターやシヴィッ

[27] 丹下は広島計画におけるモジュールの使用の説明に際して、グロピウスが「人間の尺度」を主張したことに言及している。丹下健三「広島計画1946-1953」『新建築』29(1), 1954, 11

[28] ドームハルトによれば、セルトは大会開催間際まで「コア」ではなく「心臓」とするよう周囲に働きかけ、その結果大会タイトルと出版物ともに「都市の心臓」となった。
Domhardt, *The Heart of the City*, 340 / Jaqueline Tyrwhitt, José Luis Sert, Ernest Nathan Rogers, *The Heart of the City*, London: Lund Humphries, 1952

[29] Domhardt, *The Heart of the City*, 342

[30] Sigfried Giedion, The Need for a New Monumentality, Zucker (ed.), *The New Architecture*, 549-576

[31] Ibid., 552-553

ク・センターであり、さらには博覧会や祭典における一時的なアトラクションも含まれるとする[32]。これはモダニズム建築家が都市計画を手掛けることで、人間中心の社会、コミュニティをデザインしようとする、CIAMの都市の人間化のビジョンに則った見解である。ギーディオンは建築それ自体の象徴性を否定しないが、象徴的表現を担う芸術家との設計段階からの協同は、装飾的なものに潔癖なモダニズム建築家を象徴的課題から解放するという解釈に繋がるかもしれない。

芸術家と建築家の協同、つまり「芸術再統合」によって新たなモニュメンタリティを実現させようとのギーディオンの主張は、戦後再開されたCIAMの三つの大会、1947年ブリッジウォーター（英）、1949年ベルガモ（伊）、1951年ホッデスドン（英）で継続的に議論されることになる[33]。さらに、1948年９月に英国の雑誌『ジ・アーキテクチュア・レヴュー・』がモニュメンタリティに関する誌上シンポジウムを掲載した[34]。ギーディオン、グロピウスを含むモダニズム陣営の建築家・建築史家７人が寄稿し、モダニズム建築にとってのモニュメンタリティの可否を、歴史的視点を踏まえたモニュメンタリティの定義を含めて論じた。この記事は『国際建築』1950年８月号にも一部が紹介されている[35]。この誌上シンポジウムには、丹下の言う「戦いの終った平和の記念に何かモニュメントが建てられるべきか」という具体的な問いこそないが、モニュメンタリティは全体主義の表現であって、「民主主義社会はその性質上、反モニュメンタルであって、モニュメンタリティではなくインティマシーこそが…感情的目標であるべきだ」（G.パウルソン）とする記念性それ自体への否定的意見がある一方、都市計画の中にモニュメンタリティに代わる建築的表現の可能性を期待する意見も出される。

「ここには、かつて教会、国家、支配階級の特権であった諸芸術と、社会との新たに発見された共通の土壌が横たわっている。…現代の建築家の最重要な仕事の一つは、この関係に留意しつつ、都市計画を都市建築（urban architecture）へと変えることだ。都市建築とは、全ての創造的諸力と、社会の経済的、文化的、精神的秩序全体のイメージの統合なのだ」[36]（A.ロート）

ロートのこの主張は、セルトの有機的ソーシャル・ストラクチャーとしての都市建設のビジョンに重なり合うだけでなく、丹下の主張する都市計画と建築の一体化に通じ、そこに新たなモニュメンタリティを見出そうとするものである。

この誌上シンポジウムでグロピウスは、物理的壮大さに代表される一般的な記念性の理解に代わるものとして、サイズによってではなく、想像力を活性化させる精神的な偉大さを内在させたモニュメントを求める。彼は世界を不動の真実から理解する静力学的象徴から、変化してやまないエネルギーの相対性として理解する象徴への転換が必要だとする。そうした「記念的表現に相当するものが、市民生活のより高次な形態のための新しい物理的パターンとして、連続する成長と変化のためのフレキシビリティーを備えたものを目指し

[32] Ibid., 565-566

[33] Giedion, *Architecture you and me*, 22-92. ドームハルトはCIAM6から８までの３回の大会が取り組んだ課題は本質的に変化しなかったと指摘している。
Domhardt, *The Heart of the City*, 316

[34] In Search of a New Monumentality. a symposium by Gregore Paulsson, Henry-Russel Hitchcock, William Holford, Sigfried Giedion, Walter Gropius, Lucio Costa, and Alfred Roth. *The Architecture Review*, 104（621）1948, 117-128

[35]「新しい記念性を求めて」『国際建築』17（2）国際建築協会, 1950, 6-7

[36] *The Architecture Review*, 104（621）, 1948, 128

て開発されつつある」と述べ、具体例としてテネシー川流域開発事業を挙げる。そこでは、コミュニティの形態と管理を有機的に改善する新たな集団的努力が試みられ、「より生き生きとした興奮を、市民のプライドの集積的表現に向けて動員している」とされる[37]。

抽象的な表現ながら、市民生活を活性化させる都市建設が市民のプライドを集積的に表現するという新たなモニュメンタリティの主張は、丹下がコミュニティ・センターに与えようとした「広島の市民の平和への意思を結束させるための施設」[38]としての役割を想起させる。

モニュメンタリティは、戦前から戦後にかけての丹下健三の重要な関心事であった。エッセイ「ミケランジェロ頌」（1939年）でル・コルビュジエをサン・ピエトロにおけるミケランジェロになぞらえ、創造と伝統の相克からモニュメンタリティを考察した丹下[39]は、モダニズム建築におけるモニュメンタリティを既に重要な課題と位置づけていたはずである。しかし第二次世界大戦中の日本の建築家にとってのモニュメンタリティとは、「忠霊塔」や「大東亜建設記念営造計画競技設計」に代表される国家的イデオロギーの表現としての記念碑性であった。大学院生だった当時、壮大さを基本とする「西欧の所謂『記念性』」を退け、自然との一体化を示す日本の過去の記念的建築に範を求めた〈大東亜建設忠霊神域計画〉で競技設計１等を獲得した丹下にとって、被爆地広島の「平和記念施設」で、敗戦後の一変した社会と思想の下でいかなるモニュメンタリティを実現するかは特に力を入れて取り組んだ課題であったに違いない。丹下はグロピウスとセルトの著作を通して、都市に民主主義的社会構造をもたらす都市計画原理とそれを象徴するコミュニティ・センターに出会い、ギーディオンの著作やモニュメンタリティを巡るアーキテクチュア・レヴュー誌上のシンポジウムから、都市それ自体やコミュニティ・センターにおけるモニュメンタリティの可能性と、モダニズム建築界のモニュメンタリティに対する最新知見を確認できたのではなかろうか。都市計画とモニュメンタリティを統合するコミュニティ・センターの概念を丹下はこうして見出したと考えられる。

1-4　コミュニティ・センター：「都市の心臓」と「平和の工場」

グロピウス、セルト、ギーディオンらにとってのコミュニティ・センターは、近隣住区を基本としたユニット階層構造をもつ都市計画方法論の中枢であり、CIAMの掲げる「都市の人間化」のビジョンを象徴していた。ひとりひとりがその資質を十分に発揮して社会生活を営むための必要に応えることがその目的であったが、コミュニティや個人の生活に具体的な方向性を示すものではない。一方丹下は自らの「特殊なコミュニティ・センター」を「平和の工場」と呼び、そこを訪れる人に慰霊や平和祈念よりも「建設的」な「平和を闘い取る」という使命を示唆していた。広島平和記念都市建設法に基づく国家的使命があったにせよ、「工場」の比喩は「人間優先の都市」を目指す戦後のCIAMの方向性とは異質であり、丹下独自のものといえる。丹下はもうひとつの「工場」の比喩を、「建設をめぐる諸問題」（1948年）の中で次のように用いている。

「人々の生活は、働くことと、働くための生命力の蓄積との循環として理解されるであろう。…このような生産力と人間の幸福との絶え間ない循環過程のなかに、技術が果たす役割を問い、さらに建設技術が担う意味を探求することが、いま、われわれにとっての第一の問題であろう。」

「社会的生産力の概念が理解するところでは、都市は近代生産力をつくりだす巨大な工場であります。もは

[37] *The Architecture Review*, 104（621）, 1948, 127

[38] 丹下健三「広島計画」7

[39] Benoit Jacquet, Principles of latent monumentality in Tange Kenzo's concepts of tradition and creation, Study of the formation of Tange Kenzo's architectural discourse.『日本建築学会計画系論文集』601, 2006, 211-216

や一工場のなかからは近代生産力は生まれてこない。都市および国土の装備は近代生産力の基盤である。これを循環の他の側面でとらえるならば、都市は近代的人間生命力を再生するための装置であります。」[40]

丹下はこの学会誌の論説の中で、戦後日本の都市再建の大きな障害となっていた「わが国都市の土地支配関係の封建制」を鋭く批判している。セルトが都市問題の原因を経済・産業的価値を優先する社会的構造に見出し、有機的ソーシャル・ストラクチャーによる解決を提示したように、丹下も日本の都市に現前する古い社会的構造を批判的に分析し、「建設技術は社会的生産力の基礎をつくり出す」という独自の方向性を提示した。都市と人間の幸福との関係を生産力で理解する丹下の「近代生産力の巨大な工場」としての都市像は、戦後日本社会の後進性を見据えたビジョンであり、その認識が「都市の人間化」との懸隔として現れているのである。「平和の工場」もこうした丹下の都市像に基づく発想といえよう。

「都市のコア（または心臓）」、即ちコミュニティ・センターをテーマとした1951年のCIAM8で「広島計画」を発表した際、丹下は説明文で次のように述べている。

「私たちは、日本の歴史のなかで、ゲマインシャフト、あるいは閉ざされた社会の観念が支配的であったことを認めない訳にはゆかないし、その観念は、この戦後の日本においてさえなおまだ市民生活に影響を与えている。こういうとき、一般に、コミュニティとか、コアというものについて考えようとする場合、しらずしらずのうちにも、閉ざされた社会に復帰しようとする危険性をもっているのである。」[41]

この後に続く次の文章は『新建築』に掲載されたCIAM8での発表用英文テクスト[42]には含まれず、丹下が日本の読者向けに後日追加したものであろう。

「―こういいながら、私は、それぞれが中心をもって閉じている圏域の段階的構成で都市構造を考えようとするようなものを否定したいと考えているのである―」[43]

都市のコア即ちコミュニティ・センターが象徴する都市のユニット階層構造を否定するこの文章にも、日本の後進性への認識が反映している。丹下は近隣住区理論に基づくユニット階層構造の明確な境界線と各ユニットの求心性が閉鎖性に繋がると考え、封建的社会構造が残存する日本ではその解体どころか強化を招くと危惧したようである。近代性の未成熟な日本に欧米先進諸国のモダニズムの公式をそのまま持ち込むことへの懸念が「広島計画」における丹下にはあったのである。

丹下は後年「ストラクチュアという概念の導入―コミュニケーション・スペース」という見出しの下に広島計画とCIAM8を次のように回想している。

広島計画では建築と都市の関わりあいを経験したが、当時はアテネ憲章の影響をかなり強く受けており、都市を「住むこと、働くこと、リクリエートすること、サーキュレイトすること」の４つの機能で理解していた。広島の場合はそうした機能主義的理解とは異なる次元、「全体に統一感と中心性といったものを与えるようなもの」として「都市の芯」が意識され始めた。CIAM8では「広島のコア」について発表したが、「都

[40] 丹下健三「建設をめぐる諸問題」『建築雑誌』63（737）1948年１月, 1-10, 4
[41] 丹下健三「都市のコア―第８回CIAM・1951に提出した報告―」丹下『建築と都市』世界文化社, 1975, 21
[42] K.Tange, The Core of Hiroshima: Presented for 8th CIAM Congress 1951,『新建築』29（1）, 1954, 4
[43] 丹下「都市のコア」21

市に有機的統一をもたらす構造概念としてのコアについて考える機会を与えられ」、「市民の集まる場所において、建築の理解に機能主義をこえる概念操作が必要であることを感じるようになった」[44]

丹下は広島平和記念公園・記念館競技設計の応募案作成当時、コミュニティ・センターが有機的なコミュニティ建設のための都市計画方法論の文脈にあることをグロピウスやセルトの著作から知ったと考えられるが、その有機的性質をヒューマン・コンタクトの促進のためではなく、「全体に統一感と中心性を与えるもの」と解釈し、コミュニティ・センターを広島市域のセンターと考え、都市計画案においても機能別地区分類に加えて近隣住区理論に基づくユニット再分割を取り入れようとはしなかった。その後CIAM8参加前に「都市のコア」の内容が明らかになるに連れ、丹下はあらためてユニット階層構造に着目する。当初はその「再分割」と中世都市に範を見出す説明に閉鎖性と封建社会への退行を予見し、否定的姿勢を示した[45]。CIAM8参加後、次第に単なる再分割ではなくユニットの相互連関こそがこの都市計画論の目的であることを評価し、それを「都市に有機的統一をもたらす構造概念としてのコア」と表現したと考えられる。

丹下が「都市的コミュニーション空間」や「建築のコミュニケーション・スペース」に取り組んだのは1957-60年、ボストンのマサチューセッツ工科大学で学生と「25000人のための住居単位」（これは近隣住区的ユニットの応用といえる）を研究した時であったと自ら回想するが[46]、少なくともその種子は、1946年頃丹下が触れたと思われるグロピウスの『我々のコミュニティの再建』やセルトの著作から得られていたといえよう。

2　イサム・ノグチとCIAM

イサム・ノグチが1930年代から米国におけるコミュニティ・センターの建設プロジェクトで建築家や画家たちと協同したことはライフォードによって明らかにされ、前号拙稿でも紹介したが、ノグチが既に第二次大戦前後の頃からCIAMに関係する建築家たちとつながりをもっていたことはノグチ研究において殆ど注目されていない。フィラデルフィアの靴下工場労働者のための集合住宅「カール・マックレイ・ハウス」で、ノグチを含む芸術家との協同によりコミュニティ・センターを設計したオスカー・ストノロフは、チューリヒ工科大学に学び、同大学教授でCIAM書記長であったギーディオンと親交があったばかりでなく[47]、ル・コルビュジエのアトリエに一時期在籍し、その作品集第一巻の編集者のひとりであった。さらにストノロフは1944年米国で結成されたCIAM支部にも参加していた他[48]、ルイス・I・カーンと共に『なぜ都市計画はあなたの責任か』（1943年）、『あなたとあ

[44] 丹下健三「いくつかの経験」『現代の建築家　丹下健三』鹿島出版会, 1983, 177

[45] CIAM8に参加した吉坂隆正も、丹下と同様の懸念を表明している。「Coreの問題をとり上げる時、常に私達はこの中世への憧れから時代の方向に逆行する危険を多分に孕んでいるのであった。」吉坂隆正「現代人の孤独を救う？　CIAMのCORE論議」『国際建築』18（9), 1951, 56-57

[46] 丹下『建築と都市』13

[47] 最近出版されたギーディオン夫妻の記録資料集には、ル・コルビュジエ作品集第１巻出版に際してギーディオン夫妻の助力に感謝するストノロフの書簡が掲載されている。
Almut Grunewald（Hrg.), *Die Welt der Giedions, Sigfried Giedion und Carola Giedion-Welcker im Dialog*, Zürich: Scheidegger & Spiess, 2019, 386f.

[48] Domhardt, *The Heart of the City*, 299f, 359（Anm. 4）

なたの隣人―近隣住区計画入門』（1944年）を著した[49]。また、ツッカーの『新しい建築と都市計画―シンポジウムの試み』にも「劇場と遊興施設について」を寄稿し[50]、その中で1939年のニューヨーク万国博のための、ノグチも参加していた「建築家、画家、彫刻家の協同」（APSC）グループによるコミュニティ・センターの提案に言及している[51]。

人間にとっての「レジャーの環境」を研究し、成果を著書として出版する目的で、1949年ボリンゲン財団の助成金を得たイサム・ノグチは、同年ニューヨークを出発し、イギリス、フランス、イタリア、スペイン、エジプト、インド、カンボジア、インドネシアを経て1950年５月、19年ぶりに日本の土を踏んだ。この旅の中で、ノグチはイタリアのベルガモで開催されたCIAM7に参加し、パネリストのひとりとして発言していたことが今回の調査で判明した。ニューヨークのイサム・ノグチ財団・庭園美術館（以下INFGM）が所蔵する『1949年草稿』と呼ばれるノグチの草稿（1983年頃の執筆）によれば、ノグチはパリでブランクーシを訪ねた他、以前から知り合っていたル・コルビュジエとフェルナン・レジェに会い、南仏に洞窟を所有するある人物のために、彼らが協同で「第二のラスコー」を作る計画を知る（ノグチもこの旅の途中でラスコーを訪れている）。その後イタリアに移り、ローマ、シエナ、ヴェネツィアなどを経て一端バルセロナでガウディの建築を見た後、ノグチはCIAM7の開催されるベルガモに入り、友人のジョゼプ・ルイス・セルト、ローランド・ペンローズ、リー・ミラーに会ったと記している[52]。

ノグチはこの草稿中でCIAM7の内容には触れていないが、彼が会議に出席していたことを示す資料が複数存在する。その一つはCIAMベルガモ大会での第二コミッションの議長を務めたギーディオンの著作『あなたと私のための建築』（生田・樋口訳『現代建築の発展』）である。ギーディオンやセルトらの年来のテーマで1947年のCIAM6でも提示された、建築家、画家、彫刻家の協同による芸術再統合をめぐる議論のパネリストとして、ペンローズ、セルト、ル・コルビュジエ、ジェイムズ・ジョンソン・スウィーニー、ヘレナ・シルクスら18人のひとりに、「イサム・ノグチ（ニューヨーク、彫刻家）」の名が挙げられている。ギーディオンはその内８人の発言を引用しているが、ノグチの発言は含まれていない[53]。

一方、CIAM7の公式記録によれば、ノグチは７月29日（または28日）の「造形芸術の統合」と題された第二コミッション全体会議に出席したことが確かめられ、彼の発言もフランス語で以下のように抄録されている。

「ニューヨークの画家（ママ）ノグチ（Nagukiと表記）は芸術の実践者（technician）として発言：彼はセルトと共にシヴィック・センターの必要を訴え、また、我々が何物かを信ずる能力をもつことはまちがいないとするシルクスの発言に同意する。しかし、我々の作るその何物かが疑いなく芸術的な動機から導き出された場合に限り、それは神聖とされる。諸芸術の統合はエゴイズムを克服することによってのみ達成され得るのであって、匿名の作品に到達することによってではない。我々の問題は、かたや建築と他の芸術との間に、かたや芸術と公衆との間に割り込んでいた台座や額縁を取り除くことである。あらゆる信仰が不可能となった我々の時代において、残されているのは芸術的感性だけである。今日の建築にはそれが欠けていることが

[49] Oscar Stonorov and Louis I. Kahn, *Why city planning is your responsibility*. New York：Revere Copper and Brass, 1943. / Oscar Stonorov and Louis I. Kahn, *You and your neighbourhood. A primer for neighbourhood planning*. New York：Revere Copper and Brass, 1944. 上記の書誌情報は下記サイトによった（2021年２月アクセス）。http://www.transatlanticperspectives.org/entry.php?rec=42

[50] Oskar Stonorov, Theaters and Places of Entertainment, Some speculative notes on what might cause their change. Zucker（ed.）, *New Architecture*, 99-107, esp. 107

[51] 拙稿「広島の死者のためのメモリアル図面」34-35

[52] Isamu Noguchi, “1949” typed original, inv.no. MS_BOL_088_001, INFGM Archive, 4-5

[53] Giedion, *Architecture you and me*, 79-80

ネックになっている。このような貢献を為すか否かは芸術家の判断次第である。」[54]

ノグチはセルトの発言を受けてシヴィック・センター（コミュニティ・センター）を芸術統合の場とすることを支持し、ポーランドのシルクスが述べる社会主義リアリズムに基づく表現ではなく純粋な芸術的動機を重視する。ノグチはモダニズム建築に芸術的感性が不足していることを認め、芸術統合によってその克服が可能だという主旨であろう。これはギーディオンの新たなモニュメンタリティの要請と合致する見解である。この会議でノグチに先立ち発言したセルトは、1937年のパリ万国博覧会におけるスペイン館の設計に参加したとき、協同したピカソ、ミロ、ゴンサレス、コールダーら同時代のモダン・アートがパビリオンという公共の場を与えられたことで多くの人々の共感を得た経験を踏まえ、美術館や画廊などの限られた少数者を対象とする施設ではなく、大人数が自由に美術を見て発言できる場で、作家が何の制限もなく制作・発表できる「センター」の設置を提案した。

「我々の都市計画家としての仕事はそれゆえ、人々が自由に歩いて、当たりを見回しても（看板広告によって：論者補）そこでの生活が常に脅かされることのない場所を我々の街の中に造ることである。この場所は市民が集まるために捧げられており、芸術家はそこで作品を展示できるのである。」[55]

セルトはゴシック聖堂前の広場を例に、芸術家が自由に制作して発表できる場を、市民が自由に集まり発言できる場と一致させる都市計画が必要だと呼びかける。それは如何なる形状、形体であれ、コミュニティ・センターに他ならない。ノグチがこの旅行で実地に訪ねようとしている原始以来の遺跡、神域、広場もそのように芸術が社会と分ち難く結びついていた場所であった。彼の調査対象である「レジャーの環境」は、CIAMのアテネ憲章に記された都市の基本機能のひとつとしての「リクリエーション」と無関係ではないだろう。

ノグチがこの世界調査旅行を行った1949年から1950年にかけて発表した理論的著作「近代彫刻における意味」（1949）、「諸芸術の再統合に向けて」（1949）、そして日本到着直後の講演「芸術と集団社会（コミュニティ）」（1950）は、専門分化によって芸術各分野が孤立しているだけでなく芸術が個人や少数者に奉仕し社会から隔絶していること、一方市民は宗教の支えを失い孤立し受動的であることなどの現実認識を踏まえた、芸術再統合への呼びかけを基調としている[56]。これはノグチのひとりの見解ではなく、ギーディオンやセルト、グロピウスらCIAMメンバーによるモダニズム建築と社会の関係をめぐる現実認識とその解決としての芸術再統合のビジョンと軌を一にする主張であった。ル・コルビュジエの国際連盟本部建築案の不採用に象徴されるように、社会の支配的嗜好によってモダニズム建築が社会に受け容れられない現実は彼らの重大な関心事であり、ギーディオンの「新しいモニュメンタリティ」は建築と社会を結ぶ「表現」に係る問題提起であった。一方イサム・ノグチは〈鋤のモニュメント〉（1933-34）のプランで鋤の碑を支えるアブストラクトな形状のマウンドのメ

[54] *7 ciam Bergamo 1949 documents*, Kraus Reprint, Nendeln/Liechtenstein, 1979, 11
この記録では会議の日付は7月28日（予定一欄）と29日（発言記録）の二つがあり、正確には判断しかねる。また、ノグチの綴りも二通りあり、参加者名簿ではNaguchiで、驚いたことに米国ではなく日本からの参加者として唯一人記録されている。この記録には誤記が散見されるためノグチ本人が日本人と申告したかは判断できない。

[55] Giedion, *Architecture you and me*, 83

[56] Isamu Noguchi, Towards a Reintegration of the Arts / Meaning in Modern Sculpture, *Isamu Noguchi Essays and Conversations*, Abrams, New York: 1994, 24-31, 32-36
イサム・ノグチ「芸術と集団社会」『美術手帳』31, 1950, 3-5

ンテナンスに都市労働者や農民を参加させる仕組みを提案して以来[57]、社会生活とアブストラクト彫刻を結びつける装置としていくつかのモニュメントやプレイグラウンドのプランを手掛けてきたが実現に至らなかった。コミュニティ・センターにおける新たなモニュメンタリティを通して、建築と都市に社会性と人間性を取り戻そうとするモダニズム建築家・都市計画家と、モニュメントを通して彫刻と社会の結びつきを回復しようとするアブストラクト彫刻家の関心は一致しているのである。かくしてノグチは1930年代後半のコミュニティ・センター設計においてストノロフらギーディオンに繋がる建築家との協同制作に実際に参加しただけでなく、第二次大戦後は芸術再統合の理論的啓発活動においてCIAMと相補的な論陣を張っていたのである。

結びにかえて

ギーディオンが1951年に編集し、大戦中と戦後のCIAMの活動を総括した『新しい建築の10年間　1937-1947』には、「都市のコアにおける芸術再統合　ホッデスドン1951」の見出しの下に次のように書かれている。

「アーバニズムという枠組みの中においてこそ、建築と他の造形芸術が社会的機能を果たすために統合されなければならない。この統合は、密接に協力し合い、単一のチームとして真の親交の中で働く建築家、画家、彫刻家が払う努力を結集することによって達成される。」

「この造形芸術の統合は都市の『コア』（in the city “cores”）において最も効果的に達成することが出来る。『コア』とは、小さなコミュニティのオープン・スペースであれ、最大級のシティー・センターであれ、人々がレジャー的な交流や瞑想のために集まってよい場所である。

コアは人工物であって、都市計画における人の手になる本質的要素（manmade essential element）である。それはコミュニティの集団としての心や精神の表現であって、都市それ自体を人間化し、意味と形を与える。人間の尺度（ヒューマン・スケール）と人間的価値（ヒューマン・ヴァリューズ）が公的な領域の内に再び打ち立てられ、それが市民的交流の象徴であり続けるのは、歩行者のためのこの集会の場においてである。

（中略）

我々の時代の人間化のプロセスを象徴するものとしての、このようなコアの枠組みにおいてこそ、モダン・テクノロジーと造形芸術が、社会の装置および表現として、有機的に統合されるための自然な条件が整うのだ。」[58]

「社会の装置および表現としてのコア」は、丹下の「機能」と「象徴」の調和としてのコミュニティ・センターの構想と一致している。都市のコア＝コミュニティ・センターの都市計画的な意味とモニュメンタリティはこうしてCIAMによって成文化されるが、丹下健三は1946年頃早くもグロピウスの著作から都市計画の概念としてのコミュニティ・センターと、民主主義的コミュニティにおけるその記念碑としての役割を把握し、来るべき広島平和記念公園・記念館の着想を得たのだった。また建築、絵画、彫刻の再統合がCIAM7の議題となっていることも、丹下は会議開催に先立つ1949年６月に知っていた[59]。平和記念公園全体をコミュニティ・センターとすることでモダニズム建築の新たなモニュメンタリティへの道筋を得た丹下にとって、慰

[57] Amy Lyford, *Isamu Noguchi's Modernism. Negotiating Race, Labor, and Nation, 1930-1950*, Oakland: University of California Press, 2013, 13-42

[58] Sigfried Giedion（ed.), *A Decade of New Architecture*, Zürich: Editions Girsberger Zürich, 1951, 39-40

[59] 丹下健三「建築・絵画・彫刻　技術主義から人間の建築へ」『東京大学学生新聞』1949年６月８日，２面

霊堂も記念塔も共に古い記念性に属するものであり、その認識がそれらに対する消極的姿勢へと繋がったのであった。1950年５月、絵画、彫刻に建築が加わった新制作協会の歓迎会で丹下がノグチと出会ったことは、その後だけでなく、それまでに二人が歩んだ道をも示唆していたと言えよう。丹下とノグチは、CIAMが提示しつつあったコミュニティ・センターの都市計画的意味と民主主義のモニュメントとしての可能性を、それぞれの仕方で理解していたのであり、新たなモニュメンタリティを実現する芸術再統合のビジョンが、彼らの協同を完璧なまでに後押ししていたのである。丹下とノグチが互いにいかに大きな期待を寄せたかは想像に難くない。

ノグチは日本到着後、慶応義塾大学新萬來舎の談話室と庭園で建築家谷口吉郎と、リーダーズダイジェストビルの庭園でアントニン･レイモンドと協同し、モダニズム建築とアブストラクト彫刻の統合を実践できた。ノグチは父・米次郎の記念としてデザインを任された新萬來舎談話室および庭園について、「これは英雄たちという意味での記念堂ではなく、単に一個人の追憶に中心をおくのでもない。それはすべての人のために作られる」とし、教師、学生を問わず誰もが自由に集まり語らうことができ、あるいは散策や瞑想にふけることができる場にしたかったと述べた[60]。この発想は上に見たCIAM的な意味で、大学の中にコミュニティ・センター（またはコミュニティとしての大学のコア）を作ることに他ならない。そこでは旧来の記念堂に代わる新たなモニュメンタリティが企図され、谷口吉郎のモダニズム建築にノグチのアブストラクト彫刻および家具の他、長谷川三郎、井上三綱、西田紘の絵画の展示スペースも組み込まれ、庭園と談話室が一体となった芸術再統合が実現していると言えよう。谷口吉郎もまた同じ記事の中で「この建物は、『建築の工学的な機能性』と『彫刻の自由な造型性』との握手によって、日本の建築界に、新しい進路を開拓しようとするものにほかならぬ」と述べ、モダニズム建築とアブストラクト彫刻の統合の新しさを強調している。

イサム・ノグチと丹下健三を結びつけたもうひとつのポイントは、モニュメンタリティにおける地域性の観点であろう。新萬来舎で京都の詩仙堂を引き合いに出したノグチは1951年11月26日に広島を訪れた際、外観工事の終った丹下の平和記念館に伊勢神宮の美学を、その鉄筋コンクリートのピロティに木造建築の抽象化としての「木の心」の表現を見出した[61]。そしてノグチは平和公園慰霊施設案のデザインに当たって、家型埴輪と茶室「待庵」の本質化による地上の慰霊碑と地下の慰霊堂の一体化を行った[62]。

丹下健三は、かつて〈大東亜建設忠霊神域計画〉（1942年）の説明文でゴシック聖堂の「国土を離れ自然を失いひたすら上昇せんとするかたち」や、ピラミッドなどの「人類的な支配意思の表象としてのかたち」、「人を威圧する量塊」をもって成り立つ「西欧の所謂『記念性』」を否定し、日本の記念的建築においては、「ピラミッドをいや高く築き上げることなく、我々は大地をくぎり、聖なる埴輪をもって定められた墳墓のかたちを以って。一すじの聖なる縄で囲むことによって、すでに自然そのものが神聖なる形として受け取れられた」と述べた[63]。この計画自体の国家イデオロギーへの奉仕はさておき、丹下が難ずる西欧の「記念性」の「支配意思の表象」や「人を威圧する量塊」は、上に見たアーキテクチャー・レヴューの誌上シンポジウムにおいて西欧モダニズムの識者らが示した、支配者の意思の表現としての壮大さに依拠するモニュメンタリティへの批判に通ずる点を看過してはならないだろう。さらにまた、自然の一区画を埴輪、標縄で囲んで聖域と

[60] イサム・ノグチ、谷口吉郎「慶応義塾大学・新『萬來者』設計案」他、『国際建築』17（5）, 1950, 30-39

[61]「イサム野口氏を囲んで　平和都市の建築を語る」『中国新聞』1951年11月30日，２面

[62] 拙稿「イサム・ノグチ作《広島の死者のためのメモリアル》実現されざる記念作品と芸術ビジョン。長谷川三郎との関係をめぐって」Dakin Hart and Mark Dean Johnson（ed.）, *Changing and Unchanging Things — Noguchi and Hasegawa in Postwar Japan*. Oakland：University of California Press, 2019, 82-101（Eng.）, 102-109（Jap.）.

[63] 丹下健三「大東亜建設記念営造計画競技設計当選案（1）大東亜道路を主軸としたる記念営造計画　主として大東亜建設忠霊神域計画」『建築雑誌』56（693）, 建築学会, 1942, 963

してきた日本の伝統とは、イサム・ノグチがマーサ・グラハムの舞踏〈フロンティア〉（1935年）のために考案した、ロープ一本で空間を区切ることで主題の広大さを象徴した舞台装置を想起させる、アブストラクトな特徴を示してはいないだろうか。日本古来の抽象性は1950年に再来日したノグチが長谷川三郎と共に研究した重要なテーマである。丹下が〈忠霊神域計画〉説明文で持ち出した反記念性としての日本の伝統は、ナショナリズムのアウラを纏っているとしても、モダニストの視点から選ばれたものであり、その視点は広島平和記念公園慰霊施設でも活かされたのではないだろうか。ノグチが家形埴輪の破風を本質化した地上高僅か2.5mに満たない小さな慰霊碑、同じ天井高をもつ茶室を想起させる地下慰霊堂（記名室）、それらの大きさを決定し、コミュニティ・センターとしての公園全体計画に結び付けるモジュールである「人間の尺度（ヒューマン・スケール）」[64]の適用は、西欧アカデミズムの壮大な（従って反民主主義的な）記念性へのアンチテーゼでもある。イサム・ノグチと丹下健三の協同は、地域固有の伝統に根差したアブストラクトを、民主主義的コミュニティの象徴としてのコミュニティ・センターのモニュメンタリティへと融合させているのである。このプロジェクトが実現していれば、都市のコアにおける理想的な芸術統合による新たなモニュメントとして「世界の進歩的建築家」から注目を浴びたに違いない。

イサム・ノグチは原子爆弾の犠牲者の名簿を収める地下の「記名室」を「コア」と呼び、未来の世代のための子宮に喩えた[65]。彫刻家ノグチの分担は、建築家丹下による平和の工場としての特殊なコミュニティ・センターに、あらためて人間の象徴を刻印することであった。

（横浜美術館主任学芸員）

[64] 拙稿「《広島の死者のためのメモリアル》図面」28-31
丹下が「人間の尺度」に「社会的尺度」を対置したのは、市民の社会活動を平和運動へと高める「平和の工場」としての、彼独自のコミュニティ・センター理解を反映したものであろう。

[65] Isamu Noguchi, A Project. Hiroshima Memorial to the Dead. *Arts & Architecture*, 27（4）, 1953, 16-17

The Context of Isamu Noguchi and Tange Kenzo's Collaborative Proposal for <The Memorial to the Dead of Hiroshima> in the Hiroshima Peace Memorial Park: Focus on the Community Center as Monument

Nakamura Naoaki
(Senior Curator, Yokohama Museum of Art)

An overall image of <The Memorial to the Dead of Hiroshima>, or the proposed memorial facility in the Hiroshima Peace Memorial Park, designed by Isamu Noguchi in collaboration with Tange Kenzo, was almost clarified after the identification of a series of five detailed drawings in the collection of the Kenzo Tange Archive at the Harvard University Graduate School of Design (GSD) Francis Loeb Library, as outlined in the author's article in the previous issue of this research bulletin. In that paper the author noted that Tange was opposed to a monument such as a memorial hall or memorial tower and proposed as an alternative a "community center"–an area of common interest that was one motivation for the collaboration between Noguchi and Tange. For Tange, the concept was that of a composite facility with social functions of helping to rebuild civic life and promote the international peace movement, and of a site that would naturally take on the significance of a monument due to its location at the center of the area of Hiroshima struck by the atomic bomb. For Noguchi, who had already been involved in some community center projects in the prewar United States, it was an area of practical endeavor with potential to reintegrate various fields of art through collaboration between artist and architect, and to restore direct connections between art and society that had been lost.

This paper seeks to explore the motives and concerns surrounding their collaboration by interpreting the "community center" concept in the international context of contemporary modern architecture. How did Tange become aware of the idea of a "community center," unprecedented in Japan at the time, and in what context did he understand it? And why was it possible for Tange to propose a community center as a new monument in Hiroshima? The last question connects to the issue of architectural "monumentality" as seen in Hiroshima Peace Memorial Park and Peace Hall. Another area requiring examination is the relationship between the urban-planning perspective that Tange emphasized in this project and the concept of the community center.

In light of the above, this paper seeks sources that Tange may have referenced with regard to the "community center," "monumentality," and "urban planning" in the discourse on Western modernist architecture of the same era, and compares these sources with Tange's vision in Hiroshima. It also endeavors to verify Noguchi's relationship to this discourse prior to his arrival in Japan in 1950, and to examine the shared concept which motivated Noguchi and Tange to collaborate.

Tange Kenzo had a strong interest in the CIAM (*Congrès internationaux d'architecture moderne*), which resumed its activities after World War II. In recent years, K. S. Domhardt has revealed that the community center, or the "core" of the city was a concept with symbolic significance in the urban planning theory studied by CIAM members during and after World War II. Based on the ideas of Clarence A. Perry, they proposed rebuilding the city as a community based on human contact by subdividing cities into "neighborhood units" of a certain size and population, and organizing them organically into a centripetal social structure. In this plan the community center was the element that represented the core of each unit, located at its physical

center and also forming the center of people's social lives. It appears that Tange encountered the community center as an urban planning concept in *Rebuilding Our Community* (1945) by Walter Gropius, Vice President of CIAM. Meanwhile, *The Human Scale in City Planning* (1944) by José Luis Sert, President of CIAM, aimed to address urban issues by supplementing the functional district classification of cities according to the Athens Charter with neighborhood-unit theory, and advanced the "humanization of cities" as the postwar mission of CIAM. However, Tange was strongly influenced by the Athens Charter and saw the subdividing of the city in neighborhood-unit theory as a return to a closed feudal society, and his unique perspective inspired him to propose a community center for Hiroshima that "provides a sense of unity and centrality to the whole." While CIAM likened the city to an organism (human being) and the community center (or core) to the heart, Tange described the city as a "huge factory producing the modern productive power itself," and compared the community center in Hiroshima to a "factory of peace."

Meanwhile there were calls for a new monumentality in architecture, notably from Sigfried Giedion, General Secretary of CIAM, and in a symposium in the pages of *Architecture Review* magazine (1948), there was a discussion of "emotional expression" in modern architecture, as a replacement for expression of a "ruling taste" or a historical-eclectic style, and of the validity of monumentality in a democratic society. There were debates within CIAM on the reintegration of architecture, painting, and sculpture, which were once intrinsic elements of academic monumentality, and the community center was held up as a place for concrete realization of this ideal. It seems this information gradually made its way to Tange and paved the way for his collaboration with Noguchi.

Isamu Noguchi embarked on a worldwide research trip (1949-1950) with a fellowship from the Bollingen Foundation, with the objective of surveying ruins or sites from eras when art and society were inseparably linked. Along the way Noguchi met with Le Corbusier, Sert and others, and also spoke at a conference on "reintegration of the arts" hosted by Giedion at CIAM 7 in July 1949, expressing his support for Sert's proposal for the community center as a venue for such reintegration. Noguchi's ideas on reconnecting sculpture with society shared concerns about the isolation of individual art fields due to specialization, the increasingly personal nature of art and its separation from society, and the solitude and passivity of people's life with the architectural and social ideas of Giedion, Sert and other CIAM members. These were ideas also held by modernist architects seeking to restore social significance and humanity to modern architecture through new monumentality, and sculptors seeking to connect abstract sculpture with society through monuments. It was also aligned with Noguchi and Tange's ideas on making regionality an element of monumentality.

Isamu Noguchi and Tange Kenzo's collaboration on the memorial facility in the Hiroshima Peace Memorial Park was a synthesis of abstract sculpture and modernist architecture that incorporated regionality, and also an endeavor to reintegrate the arts through the Peace Memorial Park in the form of a community center. By forming an integral part of the community center as urban planning concept, their small memorial facility – had it been realized – could have presented the world with a new vision of monumentality as anti-monumentality in a democratic society.